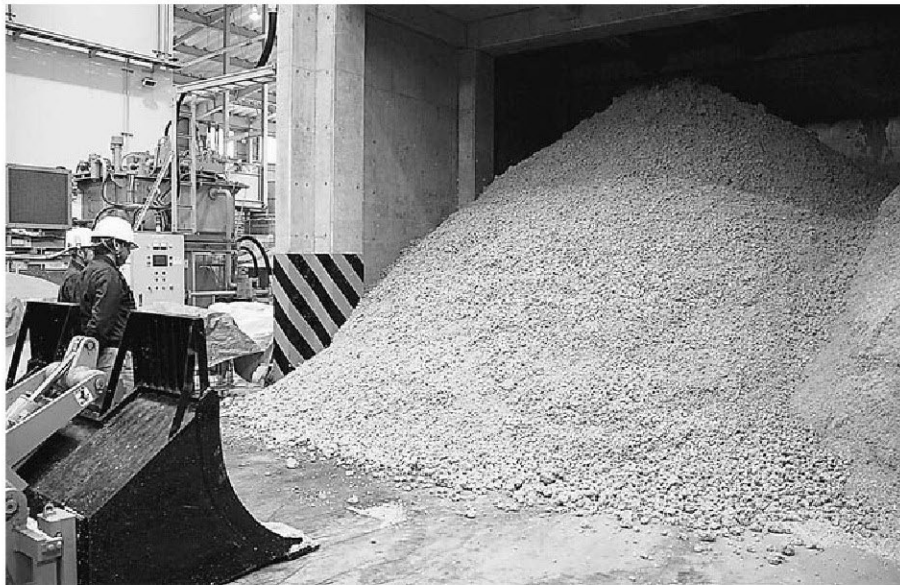


機密保持と 資源化両立



溶解処理に使われる「パルパー」。上部のコンベヤーから段ボールに入ったままの機密書類が投下され、かき混ぜて水に溶かす



異物を取り除き、脱水して完成したパルプ。段ボールなどの再生紙の原料として製紙会社に出荷される

溶解処理の過程で取り除かれた印鑑やファイルの金具、とじひもなど



事業所や自治体などが廃棄する機密書類は、シュレッダーで細断する処分方法が一般的だが、繊維が細くなりすぎるため、再生紙にするには不向き。機密保持と再資源化を両立させる方法として注目されているのが、溶かしてパルプにする「溶解処理」だ。日本で最大級の溶解処理施設を備えるエコポート九州(熊本市、石坂孝光社長)を訪ねた。

(久間孝志)

総合リサイクル業者の同社は、熊本港のフェリー乗り場の奥にある。有明海の風を受けて回る風力発電の風車が目印だ。

出迎えてくれたのは、伊藤慎之専務(55)。溶解処理設備がある棟に入るためには、警備員が常駐する門を通り、指紋認証のロックを解錠しなければならぬ。処理の中心となるのは、直径約3メートル、深さ約2・5メートルの「パルパー」と呼ばれる巨大なミキサーのような機械だ。底にあるドリル状の刃が回転し、機密書類を溶かしながら水と混ぜ合わせる。

溶解処理の特徴の一つは、ホチキスやクリップのほか、金属やプラスチックを使ったファイルなどといったままの書類もそのまま処理できること。シュレッダー処理のように分別する手間がいらない。機密書類は、段ボールに入ったままベルトコンベヤーで運ばれ、パルパーに投入される。伊藤さんは「誰も書類を目にすることはないので、シュレッダー処理に比べて飛躍的に機密性に優れている」と話す。

パルパー内で溶け残った金属やプラスチックなどは取り除かれ、どろどろのり状になった紙が「熟成タンク」に移される。タンク内でさらに異物を取り除き、脱水するとパルプの完成。段ボールなどの再生紙の原料として、製紙会社に出荷される。取り除かれた異物はさらに分別され、リサイクルに回される。

溶解処理は、製紙会社が再生紙を作る方法として導入しているが、機密文書の処理方法としてリサイクル業者が実施しているのは、全国で10社程度という。同社が溶解処理を始めたのは、2010年10月。1カ月の処理量は当初30〜50トンだったが、現在は120〜150トンに増加した。行政や金融関係の事業所などに加え、カルテを扱う病院、税理士事務所なども増えている。

処理料金は、持ち込みの場合で1キログラムあたり20円。1

時間5分を処理できる。パルパーを見下ろせる場所に専用の立会室があり、きちんと処分されているかどうか、作業を見守ることができる。

熊本学園大(熊本市)は、稼働当初からの顧客だ。「シュレッダー処理だと、ごみとして燃やされてしまう。大学として環境保全の取り組みを進める中で、溶解処理を採用した」と管財課。試験や願書関係など年間約3トンを処理しており、「循環型社会づくりに貢献しているだけでなく、機密保持の安心感も高い」と満足している。

伊藤さんは「機密文書もできる限りリサイクルすることが求められている時代だ。これから一層需要が高まると確信している」と話している。